

コラージュを用いたキャリア教育プログラムに関する研究

伊藤 嘉奈子（子ども心理学科・准教授）・工藤 吉猛（鎌倉女子大学中高等部・教諭）

1. 研究の背景と目的

(1) キャリア教育の定義

近年、キャリア教育の重要性は益々高まっている。文部科学省は、キャリア教育推進のために「職場体験」の充実を提言しており、平成17年に「中学校職場体験ガイド」を発表した（文部科学省、2005）。キャリアという語句の定義は様々あり統一されていないのが現状である。キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告では、「キャリアとは個人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及び、その過程における自己と働くこととの関係づけや価値付けの累積」としている。その他、複数の定義があるが、本研究では、「自己と働くこととの関係付けや価値付け」に重点をおいてキャリア教育を考えていくことにした。

(2) キャリア教育の意義と課題

平成20年度当時、「職場体験」は公立中学校の96.5%が実施をしていた（国立教育政策研究所生徒指導教育センター、2009）。「中学校職場体験ガイド」（文部科学省、2005）には、体験的活動例として「身近な職業聞き取り調査」、「家族の仕事調べ」など所謂、職業調べに類する活動が掲載されている。

戸塚・深田・児玉（2003）は、平成15年に広島大学で行われた進路指導講座において、中学1年生の段階からキャリア教育を導入することの重要性を指摘しており、その意味で中学1年生から職業調べを行い、職業の知識を増やすことは非常に重要なことであると考えられる。この指摘は、本研究においても重要なものと考えた。しかし、単に知っている職業数が増えるだけでは、本来のキャリア教育の目標からかけ離れているのではないかと考えた。さらに、職業調べなどを実施し、まとめて終わりという単発的な授業が多い現状は課題であると筆者らは考えた。

(3) コラージュの意義

コラージュ（collage）とは、フランス語で糊付けすることを意味し、写真や絵などを新聞、雑誌などから切り抜き、画用紙やケント紙に貼って一つの作品にすることである。もとは、20世紀初頭に生まれた美術の表現技法である。のちに、心理臨床場面において心理療法のひとつとして、コラージュ療法と呼ぶようになった。このように、美術の一技法であるため、教育場面では、図画工作や美術などの授業で実施されていることが多い。

コラージュには、心理的退行、自己表出、内面の意識化、自己表現と美意識の満足、言語表現の補助的要素、診断材料、ラポール・相互作用・コミュニケーションの媒介といった効果があると言われている（杉浦、1994；鳥丸、2007）。中井・森谷（1993）は、コラージュは実施する上で、製作者への心的不安などが低いという、実施面での安全性の高さを

強調している。さらに、最後に互いに肯定的感想を述べ合うことの重要性を挙げている。

以上のことを踏まえて本研究では、キャリア教育に、コラージュをグループワークとして導入することを試みる研究を考えた。

(4) 研究計画（3年間）

①2009年度

まず、先行研究の検討を行い、国内の中学校におけるキャリア教育に関する実践研究の動向や課題を明らかにしていくことにした。

それらを踏まえた上で、筆者らがすでに今までに実施してきたキャリア教育実践の見直しを行い、課題を明らかにすることにした。分析したのは、中学1年生を対象としたキャリア教育の指導案（独自に作成）であり、中学1年生を対象に、キャリア教育を実施し、職業知識や職業に対する意識の向上が見られるかどうか検討することを目的にした授業である。指導案の内容は、以下に示すような、文部科学省（2006）が提示する中学校段階でのキャリア発達段階とその課題を取り入れて作成されたものである。

文部科学省（2006）では、本研究で対象とする中学校段階は、「現実的探索と暫定的選択の時期」と位置づけられ、具体的に、①肯定的自己理解と自己有用感の獲得、②興味・関心等に基づく勤労観、職業観の形成、③進路計画の立案と暫定的選択、④生き方や進路に関する現実的探索、を促進させることが教育目標とされている。

さらに、銭谷（2006）が、職業調べの作業の中で、肯定的自己理解と自己有用感を獲得することが重要と指摘している点と、知っている職業数を増やし、職業に関する知識を身に付けることで、職業に対する意識の向上を目指すことが重要という点を、本研究授業の主目標と位置づけて、指導案が作成されたものである。

また、職業調べの作業には、コラージュを導入することを試み、さらにコラージュ作品をもとにしてグループ内で発表し合い、集中的なグループ体験を経験しながら職業に対する意識の向上を目指し、その教育効果の検討を試みることとした授業展開であった。その効果は、坂柳ら（1986）の進路成熟態度尺度を用いて検討することとした。

②2010年度

国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2003）は自立的進路発達課題が高等学校段階の課題であるとしており、中学校段階における自立的進路発達の難しさを指摘している。研究該当校のような中学校と高等学校で一貫的な教育を行っている場合、生徒は高等学校受験を経験しないため、自らの意思と責任で進路を決定する能力・態度を高等学校受験以外の方法で身に付ける必要があると筆者らは考える。

そこで、2年目は、縦断研究として、1年目と同一の調査対象者に、2年後の中学3年生になった段階でキャリア教育の授業を行うことにした。授業では、単元「将来設計能力・人間関係形成能力・情報活用能力の3能力の向上」を扱うことにした。さらに、授業に、コラージュとSGEを導入することを試みた。その教育効果は、坂柳ら（1986）の進路成熟態度尺度を用いて検討することとした。

③2011年度

高校入学後の4月、5月に友人ができず、教室に居場所がないと感じるなどの「高1クライシス」に陥る生徒への対応策は少ない。また、キャリア教育を行う上で、友人関係が良好であることの重要性は、筆者らは、経験的に感じている。

榎本（1999, 2000）は、中学生から大学生までを対象とした、青年期の友人関係の発達的变化を調査した結果、小学高学年生、中学生で見られる類似性を重視した関係から、高校、大学生ではお互いの違いを理解した相互的な関係へと変化することを明らかにした。そして、お互いを理解し合うような話し合いをする活動を「相互理解活動」と述べ、青年期の友人関係の最終段階の活動と位置づけている。

また、田上（2004）は、居場所のある集団の条件として、①いい人間関係がある、②仲間とともに自分は意味あることをしているという充実感がある、③楽しい経験ができる集団である、の3つの条件を挙げている。よって、高校入学後の4月、5月に自分の居場所がないと感じる生徒は、このいずれも体験できていないか、あるいは相互理解活動に臨んで、その結果、不安を感じていると考えられる。

これらを踏まえ、3年目は、研究協力校の高等学校の1年生を対象とした研究を考えた。研究協力校では、4年前より、入学時のオリエンテーションの際に、構成的グループ・エンカウンター（structured group encounter：以下、SGEと示す）を実施して、友人関係構築のきっかけや居場所作りのきっかけを提供していることがわかった。

そこで、SGEを実施し、生徒がその体験をどのように捉えたかを検討することを目的とした。

2. 研究成果

(1) 中学1年生を対象としたキャリア教育実践の分析（2009年度～2010年度）

まず、先行研究の検討を行い、国内の中学校におけるキャリア教育に関する実践研究の動向や課題を明らかにしていった。それらを踏まえた上で、筆者らがすでに今までに実施してきたキャリア教育実践の見直しを行い、課題を明らかにしていった。そして、このような先行研究の検討および、筆者らの実践研究の分析の研究成果を、2009年度の本学紀要に掲載した（伊藤・工藤, 2010）。よって、以下では、その研究概要を簡単に述べる。

筆者らは、中学1年生57名に対して、2007年11月に実施した「キャリアガイダンス」の授業を分析することにした。この授業は、職業知識と意識の向上を図ることが目標としており、多くの先行研究で行われているような、単なる「職業調べ」を行うだけの授業ではなく、コラージュ作成という演習も導入してみるという試みを行った。

その結果、コラージュ作品をもとにして、グループで職業に関する話し合いをする際に、グループ内でのコミュニケーションの促進効果や、進路に関する知識や意識の向上が統計分析上も明らかになった。しかし、これらがコラージュによる効果なのかどうかは今後の課題として挙げられた。

(2) 中学3年生を対象としたキャリア教育実践の検討・実施（2009年度～2010年度）

坂柳ら（1986）や、筆者らが行った前述の中学1年生のキャリア教育実践の分析結果からわかるのとおり、職業的進路成熟態度は一度の授業で変化が見られるようなものではな

く、長期に渡り授業を実施することで向上が期待できると考えられた。よって、中学3年間を通して、キャリア教育の充実を図る授業を展開し、その教育的効果を検討する必要があると考えた。

そこで、新たに中学3年生を対象としたキャリア教育の授業プログラムを検討・作成し、実際に授業を行うこととした。この研究成果については、2010年度の本学紀要（伊藤・工藤、2011）に掲載した。よって、以下で、研究概要について簡単に述べる。

2009年度の研究と同一の調査対象者に対し、縦断的研究を実施した。対象者は、中学3年生であり、2009年11月に「キャリアマトリックスを用いた職業調べとコラージュ、SGEを用いたキャリアガイダンス」という内容で、授業を実践した。単元目標は、職業知識の向上と職業に対する意識の向上、および、現在の学びや進路（文理）選択と将来の職業の関連付けとした。授業の工夫点として、事前学習として夏休みにキャリアマトリックスを利用し、自分に適した職業を検索する課題を出した。さらに、検索結果として適職と判断された職業について、キャリアマトリックスで詳細に調べてまとめ、さらにそれらの職業に関する写真や絵の切抜きを用意するよう課題を出した。授業には、本研究で重視しているコラージュを導入した。さらに、SGEの手法を用いて、自分の進路選択や将来の職業について発表し、その後、グループで感想を述べ合うシェアリングを行った。また、職業知識の向上と職業に対する意識の向上という単元目標の到達状況を把握するため、授業の前後で質問紙を実施した。

その結果、職業に対する意識の向上や、進路選択に関する理解の深まりなどの教育的効果が見受けられた。さらに、コラージュについては、「切り貼りの作業が面白かった」「コラージュがあったために、グループ発表がしやすかった」などという感想が多く挙がり、コラージュが媒介となり、発表がスムーズにいったり、場が和んだりするような効果が伺えた。SGEについては、「グループでのワークが楽しかった」「知らない人とも交流できた」「グループワーク後に行ったシェアリングが良かった」などの感想が多く挙がり、質問紙調査および面接調査から、SGEの効果が伺えた。

（3）中学3年生を対象とした追跡調査（面接調査）の実施（2010年度）

前述の（2）の研究の追跡調査として、コラージュを用いたキャリア教育に関しての感想を聞き、授業後の進路意識の変化を検討する目的で、面接調査を実施した。調査対象者は、（2）の研究の対象者の中で、面接調査協力が得られた2名であった。調査方法は、1対1による半構造化面接にし、面接は録音して、逐語録を作成し、分析資料とすることについて、調査協力者の了承を得てから面接を実施した。面接時間は、約1時間であった。

（2）の研究結果と、伊藤・工藤（2009）から、中学校3年間でのキャリア成熟の変化プロセスを分析することが、キャリア教育の効果を検討する上で重要であることが示唆されているため、中学校3年間で実施したコラージュを用いたキャリア教育に関する感想に焦点をあてた以下の質問項目を考えた。

キャリアガイダンス（キャリア教育の授業の名称）について、①3年間を通じて、キャリアガイダンスを受けた感想と学び、②コラージュ作成の感想、③普段の授業と、コラージュを作って他の人に発表する授業との違い、④キャリアガイダンスで、コラージュを作成したことにより、進路にどのような変化があったか、⑤今後の進路、⑥その進路を考え

るきっかけ、⑦進路に影響を与えた人物・物・事柄など、⑧後輩へのメッセージ、である。

逐語録から、中学校3年間に受けたキャリア教育の授業の振り返りに関する内容と進路選択過程に関する内容を抽出して、データ分析した。その結果を以下に示す。

○コラージュの感想

- ・一年に1回、キャリアを考える授業があると、進路を考える気になった。
- ・自分が、細かい切り抜きを持っていったら、一緒のグループの二人から、マニアックだねと言われた。でも、それはそれで自分らしくていいと思った。
- ・自分の知らない職業を真剣に考える人がいるのだなとわかった。
- ・切り抜きをすることで、自分の好きな職業を深く知ることができた。

○普段の授業との違い

- ・自由な感じがする。ただ、中にはふざけている人がいるかも。
- ・切り貼りする時間がなくて、最後は適当に貼ってしまった。真ん中の題名も、時間がなくて急いで書いたのが心残り。

○コラージュ作成による進路の変化

- ・進路がはっきりしてたので、あんまり変化はなかった。
- ・ますますその職業をやりたいという気持ちにはなった。他の子たちが進路がはっきりしていないというのと自分は違うので。でも、そういう子たちの気持ちもわかる。

○今後の進路を決めたきっかけ、進路に影響を与えた人物・物・事柄など

- ・数学の先生。数学が嫌いだったのに、この先生のおかげで好きになり、大学も数学を使う学科に進もうと思うほど影響を受けた。とても良かったし、感謝してる。
- ・お父さん。お父さんの趣味に自分も興味・関心をひかれて、なんとなくそういう職業を考えるようになった。

○進路に悩む後輩へのメッセージ

- ・初めから好き嫌いして、嫌いなものは考えないようにするのはではなく、いろんなものを見てから進路を決めていった方がいいと思う。
- ・どんどん先生方に相談したりすると、いいと思う。

調査対象の2名とも、非常に進路がはっきりしていた。また、キャリアモデルとなる教員や父親の存在が、進路を見つめるきっかけになっているようだった。

コラージュに関しては、2名とも、グループ内でのやりとりよりも、個人作業としての楽しさや気づきを得たようである。かつ、切り貼りをしながら、自己の内面を見つめる作業をしていたようであり、心理療法としてのコラージュ作成の体験過程に似た体験を語っていたのが印象的であった。伊藤・工藤(2009)では、コラージュは、グループで発表し合う際に発表をスムーズにする媒介としてプラスに作用し、コラージュを用いながらお互いに自己の進路を発表し合うことで、他者理解を深めることが明らかとなったが、この2名のように、さらに、個人的な体験を深め、自己洞察を進め、進路をじっくりと考えるような個々人の自己理解体験を深める方向にもプラスに影響することが伺えた。

この研究成果は、まだ論文としてまとめていないため、今後、まとめたいと考えている。

(4) 高校1年生を対象としたキャリア教育実践の検討・実施（2010年度～2011年度）

伊藤・工藤（2010a, 2010b, 2011）から、初年次におけるキャリア教育の重要性も課題として明らかになった。そこで、先行研究を踏まえ、高校1年生に対するキャリア教育の授業プログラムを検討・作成することとした。特に、伊藤・工藤（2010b, 2011）の2年間の研究結果から、コラージュとSGEの二つを導入した授業展開が、生徒の満足度が高いことが明らかとなってきたので、これらを用いた授業を検討した上で、実際に授業を行った。

その研究成果は、2011年度の本学紀要に掲載することにし、現在、投稿中である（伊藤・工藤, 2012）。そこで、概要について、以下で簡単に述べる。

対象者は、2009年度、2010年度の研究と同一の対象者にし、縦断的研究を実施することにした。具体的には、高等学校1年生159名に対し、2010年4月に入学時オリエンテーションの1コマとして、SGEを実施することにした。オリエンテーションでは、コラージュの作成まで行うのは困難との結論に至ったため、まずは、入学直後の生徒にSGEを実施することにし、学級集団が深まってから、授業内でコラージュを実施するという計画を立てた。

SGEでは、自己紹介を行う「積み重ね自己紹介」というエクササイズを独自に考案した。これは、グループ内で、順番に自己紹介をフルネームで1周行うものである。自己紹介の最後の方は全員分の名前を言わなくてはならないため、名前を忘れて思い出せない場合、周囲に聞いても良いことや、グループのメンバーが教えてもよいことにした。全てのエクササイズ終了後、以下に示す質問紙への記入を求め、感想をシェアリングするようにした。質問紙は、①「積み重ね自己紹介」のエクササイズ体験後の感想、②エクササイズを体験して嬉しかったことや楽しかったことなど、③体験したエクササイズをクラスでも体験したいと思うかどうか（はい・いいえの2択）からなるものを独自に作成した。

その結果、多くの生徒が、「楽しかった」「自分のことをわかってもらえて嬉しかった」といった肯定的感情を感想として挙げており、グループ体験からプラスの影響を受けたことが伺えた。また、高校入学時という、新たな友人関係を築き上げることへの悩みや不安を抱える者が少なからずいると予想できる時期に、楽しみながら人間関係づくりを体験できるSGEを実施することは、生徒にとって有益だったことが伺えた。今後の課題としては、水野（2009）や原田・田中（2006）も指摘しているとおおり、教育現場でSGEを実施する際には、安全性への配慮を充分行うことの重要性が示唆された。このSGE体験がその後の学校生活に、どこまで般化し、満足度や達成感が持続するものなのかも今後の課題として挙げられ、継続研究を行う必要があると考えられた。

(5) 国内外の中学校・高等学校におけるキャリア教育実践の実態調査（2011年度）

論文だけではわからない具体的な実践方法や実践上の工夫、授業を受けている生徒の様子について、国内外のキャリア教育実践の実態調査を行いたいと考えていた。

しかし、2011年度は、3月に大震災が起こったことにより、計画していた多くの現地調査や、学会発表ができなくなってしまったが、現地視察については、1校行うことができた。2011年8月に、神奈川県内の私立中学高等学校A校を視察した。A校では、進路指導部に所属する教員を中心とする2～3名の教員がSGEの研修会に参加し、学校に戻って

から教員を対象に研修会で体験したSGEを実施する。各教員は、体験したSGEプログラムを元に、教室で生徒に対してSGEを実施する。この方法により、低学年を中心に、隔週でSGEを実施することができるようになっている。このような有意義な実態調査ができ、この知見を今後の研究実践に活かしていきたいと考えた。

3. まとめ

本研究では、キャリア教育の授業の中に、コラージュを導入した教育プログラムの効果を検討しながら、教育実践を行っていった。

2009年度から2011年度の3年間に、毎年実施した教育実践から、コラージュという楽しくできる作業を実施した後、グループでの体験活動を取り入れることにより、授業への満足度が増すことが伺えた。また、グループ体験活動後のシェアリングを行い、同じグループのメンバーから同意を得ることにより、自己肯定感が上昇することも伺えた。このように、コラージュの効果だけでなく、SGEとシェアリングの効果も明らかとなった。

今後は、コラージュ作品の分析も実施したい。そうして、生徒にとって充実したキャリア教育の実践を行っていくために、今後も研究を継続していきたい。



コラージュ作品

引用・参考文献

- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 榎本淳子 2000 青年期に友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究, 48, 444-453.
- 原田友毛子・田中輝美 2006 構成的グループ・エンカウンターの校内研修会におけるリーダーの働きかけ—実施への効力予期をたかめるために— 教育カウンセリング研究, 1, 12-21.
- 伊藤嘉奈子・工藤吉猛 2010a コラージュを用いたキャリア教育プログラムに関する研究 鎌倉女子大学学術研究所報, 10, 83-85.
- 伊藤嘉奈子・工藤吉猛 2010b コラージュを用いたキャリア教育に関する一考察 鎌倉女子大学紀要, 17, 19-30.
- 伊藤嘉奈子・工藤吉猛 2011 コラージュを用いたキャリア教育プログラムに関する研究 鎌倉女子大学学術研究所報, 11, 31-33.
- 伊藤嘉奈子・工藤吉猛 2012 (投稿中) 高等学校の新入学オリエンテーションにおける

- 構成的グループ・エンカウンターの実践的研究 鎌倉女子大学紀要, 19.
- 國分康孝(編) 1992 構成的グループ・エンカウンター 誠信書房
- 國分康孝・國分久子 総編集 2004 構成的グループエンカウンター事典 図書文化
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2003 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2009 平成20年度 職場体験・インターンシップ実施状況等調査の結果について
- 水野邦夫 2009 学生集団に対する継続的構成的グループ・エンカウンターの実施が自己概念の変化に及ぼす効果について—看護系専門学校における実践をもとに— 帝塚山大学心理福祉学紀要, 5, 113-123.
- 文部科学省 2004 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～
- 文部科学省 2005 中学校職場体験ガイド
- 文部科学省 2006 小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引 —児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために—
- 文部科学省 2009 学校基本調査結果概要
- 文部科学省 2011 学校基本調査結果概要
- 内閣府政策統括官 2009 高校生活及び中学校生活に関するアンケート調査—高等学校中途退学者及び中学校不登校生徒の緊急調査.
- 中井久夫・森谷寛之 他 1993 コラージュ療法入門 創元社
- 坂柳恒夫・竹内登規夫 1986 進路成熟態度尺度(CMAS-4)の信頼性および妥当性の検討 愛知教育大学研究報告, 35, 169-182.
- 杉浦京子 1994 コラージュ療法—基礎研究と実際— 川島書店
- 戸塚唯氏・深田博己・児玉真樹子 2003 中学校における進路指導の実践—平成15年度進路指導講座資料の分析— 広島大学心理学研究, 3, 177-201.
- 鳥丸佐知子 2007 コミュニケーションワーク活性剤としてのコラージュの有効性について 京都文教短期大学, 46, 109-119.
- 中央教育審議会答申 1999 初等中等教育と高等教育との連携の改善について
- 吉田辰雄 2006 最新 生徒指導・進路指導論—ガイダンスとキャリア教育の理論と実践— 図書文化
- 銭谷眞美 2006 中学校職場体験ガイド 文部科学省HP
- 田上不二夫 2004 不登校 日本教育カウンセラー協会 編 教育カウンセラー標準テキスト初級編, 図書文化, 184-192.